

■ ひとまず米・日株価の値動きが安定を取り戻すかに注目

前回更新分の本欄で、ユーロ/ドルについて「そろそろ上げ一服となってもおかしくない」と想定したとおり、先週は一旦利益確定&調整売りの動きが出ていた。むろん、月末特有のフローが見られていたということもあるうえ、市場における年内の米利下げ幅に対する見立てが「少々行き過ぎていたのではないか」とのムードが広がったこともある。



ただ、左図にも見る通り、足元ではユーロ/ドルが徐々に下げ渋る動きとなっている。9月に入ってからからは21日移動平均線（21日線）が下値を支える格好となっており、ひとまずユーロ売り・ドル買いの流れは一服。先週末までの値動きは、あくまで月末要因によるものであったと捉えられるところもないではないが、何より想定よりも弱めの米指標結果の発表が続いて

いることで、9月の米連邦公開市場委員会（FOMC）における大幅利下げの可能性が高まっているとのムードが強まっていることが大きい。

3日に発表された8月の米ISM製造業景気指数は、前回からは改善したものの事前の市場予想を若干下回るものとなった。結果、同日の米株市場は主要3指数が軒並み大幅安となり、翌4日の日経平均株価も1600円超の下げを演じるなど、足元では一気にリスクオフのムードが広がる。

些か過剰反応との感も否めないところであるが、本日以降も重要な米指標の発表が続き、いよいよFOMCの日程が近づいていることなども考慮すると、普段以上に神経質になってしまうのは無理からぬところと言えようか。

既知のとおり、昨日（4日）発表された7月の米求人件数も予想を大きく下回るものとなり、前回（6月）分のデータも下方修正されていた。そして、明日（6日）は8月の米雇用統計の発表である。前回（7月）分の発表時、その結果に対して市場がネガティブな反応を強く示したことを思い起こせば、足元で警戒の動きが広がるのも道理ではある。

今週2日、3日に一時147.20円処まで持ち直す動きとなっていたドル/円も、足元では143円台前半と大きくドル安・円高方向に振れている。

結果、日本株が全般に弱含みで推移すると、ドル/円の上値は一層重くなる。仮に、今月のFOMCにおける米利下げ幅が通常の2倍の0.5%ポイントとなった場合、米国経済の軟着陸（ソフトランディング）観測は一気に後退してしまうだろう。金融政策の打ち出し方そのものが景況感を悪化させるという、最も避けられたい事態に陥る可能性もゼロとは言えない。逆に、利下げ幅が0.25%ポイントに留まれば、そのこと自体が市場に安心感をもたらすということもあろう。

再認識しておきたいのは「金融政策は常に景気（実態）の“後追い”となるのが宿命」ということである。誤って“先回り”してしまえば、むしろ政策意図とは逆の方向に景気が走り出してしまうからである。もちろん、政策担当者らも「そんなことは百も承知」であろうし、9月のFOMCにおいても冷静かつ適切な判断が下されるものと個人的には期待する。

仮に明日発表の米雇用統計が弱めの結果であった場合、それが市場にとって「もはや織り込み済み」であるかどうかをまずは確認したい。結果、ドル安・円高方向に一旦振れたとしても、ドル/円については8月5日安値＝141.69円処、あるいは一目均衡表の週足「雲」下限（現在は140.78円処）が下値をサポートする可能性が高いと見ておきたい。もちろん、日本株の値動きが安定を取り戻すかどうかという点も見逃せない。

（09月05日 09:30）